

自己受容を育み自己肯定感を高める児童の育成

～生徒指導の3つの機能を生かした授業づくりと振り返る学びを通して～

糸満市立西崎小学校教諭 徳田安彦

I テーマ設定の理由

令和の日本型学校教育の答申に「(6) いじめの重大事態、虐待事案等に適切に対応するための方策」
として「児童生徒の問題行動の発生を未然に防止するために、成長を促す指導等の積極的な生徒指導の
充実」と生徒指導の本質が示されている。

小学校学習指導要領解説総則編(以下「総則編」と表記)では「児童理解を深め、学習指導と関連
付けながら、生徒指導の充実を図る」と述べている。また、沖縄県教育委員会の「令和3年度学校教育
における指導の努力点」では「5生徒指導の充実」「25 子供の貧困対策の推進」に「生徒指導の3つ機
能を生かした授業」と示していることから、生徒指導が多岐に渡ることがわかる。

また、「令和3年度全国学力・学習状況調査質問紙調査の結果(2) 質問紙と学力のクロス分析」で
は「『学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげるこ
とができている』と回答している児童生徒が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる」との結果を示
している。つまり振り返りの充実が、児童の学力向上に重要であると考えられる。

これまで日々の教育実践において「生徒指導」とは、問題行動が起きた時に対応する指導の認識で
あった。その他にも、教科指導と生徒指導を相互に関連させて支援する認識が弱かった。さらに、学習
理解を深める活動として学習の振り返りが大切なことは意識していたが、学習活動の途中で授業が終わ
ってしまう等、振り返りを書く時間が確保できなかったことが課題であった。

また、自己肯定感を高める為に「褒める」ことは重要なことではあるが褒めてもなかなか変容しな
い児童もおり「『褒める』だけでいいのか」と日々の教育実践で疑問があった。少年厚生施設の教育指
導者の経験談から「褒める教育だけでは問題は解決しない」との指摘もある。

そこで、自己肯定感を構成する要素の一つである「自己受容」に着目し、生徒指導の3つの機能と
振り返る学びに重点を置いた授業において、自己を見つめる活動を行えば、自己受容を育むことができ、
自己肯定感を高めることができるであろうと考え本テーマを設定した。

II 研究仮説

生徒指導の3つの機能と振り返る学びに重点を置いた授業づくりを行えば、自己受容を育むことが
でき、自己肯定感を高めることができるであろう。

III 研究の内容

1 自己受容について

(1) 自己受容とは

有村(2017)は、自己受容について「自己を認識する際に、自分のあり様やこころ、自らの姿
をあるがままに肯定し受け容れることである。(中略)また、このプロセスで、自分にとっての肯
定感・否定感、よし・悪し、できる・できないなどの自己評価の問題にも関連する」と述べてい
る。しかし、今の自分自身の「よし・悪しをありのまま受け止める」ことは、自分の悪いところ

(できない所、認めたくない部分)を認める事であり、周りからの視線、社会的立場によっては困難であるとする。板津(2012)は「自己を受容することは、目的や目標というよりも、今、生活の中で実践していく問題であり、生きる姿勢の問題である。すなわちその過程が重要になる」と述べているように、認めたくない部分があることを受け容れることも「自己受容」である。人は、できない所や認めたくない部分をそのままにしたい。どこかで「乗り越えたい」「変わりたい」と思う。それが「成長」につながると捉える。

このように自己受容とは、自分自身を乗り越え、将来の夢の実現に向けて必要なことである。また、年齢によって受け容れる内容も様々で、一生をかけて行っていくものであり、人格の成長に必要だと考える。

(2) 自己受容を育むとは

自己受容を育む為には、他者からの評価が重要になる。その一つが外発的動機づけと内発的動機づけと考えられる。鹿毛(2012)は外発的動機づけとは「報酬を求める、あるいは罰を避けるために行動する」、内発的動機づけは「その活動自体から生じる固有の満足を求める」と述べている。藤田(2019)は「行動の維持の観点からは内発的動機づけが望ましいが『内発的動機づけがなければどうしようもない』という考えにとらわれてはいけない。最初は、外発的動機づけによって学習行動を生起させ、段階的に内発的動機づけによる学習行動に移行させる発想を持つ」と述べている。また、祖父江(2015)は『自分の中にもよい自己がある』という感覚が増強されればネガティブな情動や考えをそれほど怖れなく済む「自己否定感などの悪い自己像の投影が減少する」と述べており、本研究では、友だちの「良さ」を見つける外発的動機づけの活動から、自分が知らなかった「良さ」が分かり「もっと自分の『良さ』が知りたい」と内発的動機づけに移行し、良さを増強することを「自己受容を育む」と捉える。

2 自己肯定感とは

「自己肯定感」とは「自分自身の存在に対する認識として、自己の身体的な特徴や能力や性格などについて肯定的に考えたり、感じたりする感情をさす」(「教育用語辞典」編集委員山崎・片上)と定義される。また「自尊心」「自己受容」「自己効力感」を包摂した、積極的に自分自身を受け入れ、ありのままの姿を認める感覚とも述べている。中村(2017)は「自己は、『勉強』『友人関係』『遊び』『部活動』『地域・社会活動』など、あらゆる場面で考え方や行動に大きな影響を与えている」と自己肯定感を高める取り組みを進めていくことの大切さを述べている。

(1) 自己肯定感を高めるには

中村(2017)は「自己肯定感が高まった状態は、自分のよさを知り(自己理解)、ありのままの自分を受け入れ自分のことが好きになること(自己受容)であり、他者から認められたり、受け入れられたりすること(他者理解)により、自己肯定感が育つと考える。さらには、よいところだけでなく、よくないところも含め、ありのままの自分を受け入れることも必要となってくる」と述べている。

このように、自己肯定感を高めるには自分自身を知り、そこからありのままの自分を受け容れることが必要である。自分を受け容れることで、他者を受け容れる心の素地が生まれ自己肯定感が高まると考える。

(2) この時期の児童の発達段階

精神分析家のエリクソン(Erikson, E. H)は、図1のように人間の発達を8つの発達段階に分類し、人間が一生発達し続ける存在であることを明示している。小学生は、線に囲まれた第4段階の「IV学童期」にあ

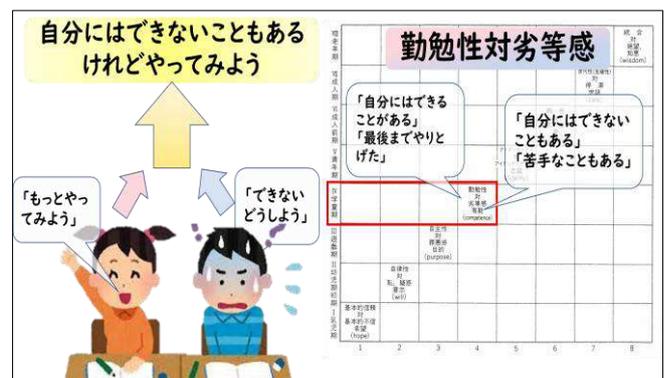


図1 エリクソンの発達図式(Erikson, 1982)をもとに作成したイメージ図(囲み線筆者)

たる。この段階は「勤勉性対劣等感」の時期であり葛藤を乗り越えることが求められている。学童期は、小学校に入学し知識や技能を一斉に修得していく。学習やその他の活動で、自分自身の力で自分の能力を高めていく努力を行うことで成果が上がり、自分の力になることを実感する。そこで「もっとやってみよう」という意欲につながり、これが勤勉性につながる。その反対に他者よりも能力が低い場合、例えば、みんなが分かった問題を解くことができなかつた時等、劣等感を体験することになる。また、この時期は、自分の能力の高低や仲間での地位や評価が、鮮明に意識される。このように児童は、勤勉性と劣等感を体験していくことが重要であり「自分にはできることがある」「最後までやりとげた」といった経験や「自分にはできないこともある」「苦手なこともある」ということを自己のなかで受け止め統合していくことで「自分にはできないこともあるけどやってみよう」という感覚を持ち、この時期の葛藤を乗り越えられると捉えられる。

このことから、エリクソンの提唱している「IV学童期」は、どの発達段階よりも自己受容を育み自己肯定感を高める時期に適していると考えられ、その為にも自己を見つめる振り返りの充実が必要と考える。

3 生徒指導の3つの機能を生かした授業づくりとは

(1) 生徒指導の意義

生徒指導提要（2010）に生徒指導の意義として「生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」と示されている。「総則編」では「教育機能としての生徒指導は、教育課程の特定の領域における指導ではなく教育課程全領域において行わなければならないものである」と示している。このように生徒指導とは、社会的資質、行動力を高めるために必要な資質・能力であり、各教科の授業実践において生徒指導の3つの機能を取り入れる必要があると考える。

(2) 沖縄県の質的授業改善

「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトII」（2021）は、3つの視点と5つの方策で児童の学びの質を高めることを提言している。生徒指導の3つの機能を生かした授業づくりは「方策1 日常化する（質的授業改善）」に掲げられており「自己存在感を与える」「共感的人間関係の育成」「自己決定権の場を与える」の推進を示している。これらの3つの機能を生かした授業展開例は、通常行っている指導法も含まれている。その指導法が何を意図しているのか、何のために行うのかを価値づけすることが大切だと考える（表1）。

4 振り返る学びとは

「総則編」では「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする学習を、計画的に取り入れるよう工夫すること」と示されている。文部科学省（2019）「新しい学習指導要領の考え方ー中央審議会における議論から改定そして実施へー」では授業最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れた学校

表1 生徒指導の3つの機能を生かした授業展開例（プロジェクトII 2021）をもとに作成
太字は、本研究で行った教師の手立て

機能	内容	授業展開例(教師の手立て)	児童の反応
S1「自己存在感を与える」	児童生徒が自分のよさを生かし、興味関心を高めるような授業を展開する。	「導入」の場面 ア 簡単な問題を解いたり、前時のまとめを振り返る。 イ 児童の振り返りを紹介し、本時の「めあて」に気づかせる。 ウ 誤答を提示し、全児童が問題に疑問を持ち、参加しやすい雰囲気をつくる。 「展開」の場面 エ 板書で児童の多様な考えを繰ってつなげる活動や、丸む等工夫する。 オ 机間指導の場面で良いお手本の児童やグループを紹介する。 「終末」 カ 競争する児童以外にもねらいに迫る「振り返り」を書いて児童に発表を促す。 キ 発表が苦手な児童の代わりに教師が代読等の配慮を行い発表する。	「この問題だったら答えられそう」 「OOさんと同じ考えだったのでうれしい」 「自分も見つけていきたい」 「先生が発表を代わりに読んでくれたから次は頑張ってみようかな」
S2「共感的人間関係の育成」	児童生徒が互いの考えを交流し、互いのよさを学び合えるような授業を展開する。	「導入」の場面 ア 不十分な情報を提示し、話し合いの中で必要な情報を見つけてさせる。 イ 児童のつぶやきをつなぎ、本時の「めあて」に気づかせる。 「展開」の場面 ウ ペアやグループ学習を行い意見を交流させる。 エ 黒板で問題を解答したり説明するときも複数で行わせる等工夫する。 「終末」 オ 授業の「めあて」や「振り返り」等を記入した児童同士で互いのノートを読み合わせる。 カ 全体で「振り返り」の交流を行い、書く視野を広げる活動を行う。 キ 友達の「良かった所」や「勉強になった」等、自己の学びにつながったテーマで感想を伝え合わせる。	「友達は、OOから見つけていたでこれからは自分も見つけない」 「OOのようにできている人をまねしたい」 「友達の考えを聞いて参考にしたい」 「OOさんの説明は分かりやすかったからすごい」 「OOさんの考えがわかって良かった」
S3「自己決定権の場を与える」	児童生徒が主体的に学ぶことができるような課題の設定や学び方について、自ら選択できるような授業を展開する。	「導入」の場面 ア 複数の情報の中から自分で選んで問題解決に向かう場を設定する。 イ 自分が考えた(宿題等)事をもとに授業展開に繋げる。 「展開」の場面 ウ 一人学びの時間を十分確保する。 エ ICTを含む教材を準備し児童が主体的に学ぶ環境を整える。 「終末」 オ 本時の学習の評価を自己評価、相互評価する「振り返り」学習の時間の確保する。 カ 自分が選んだ以外の解答を友達と交流させる。	「私は、Oだと思う。皆は何を選んだか楽しみ」 「OOについて学んだのでこれから取り組むみたい」 「自信をもってこれからはOOを行いたい」 「将来はOOになりたいのでこの学習で勉強しOOになりたい」

は「教育効果の高い学校」と紹介されており、振り返りを意図的、計画的に取り入れることの重要性が示されている（資料1）。

そこで、本研究では、児童が振り返るために学ぶ手立てを「振り返る学び」とする。

(1) 振り返る意義

『問い』が生まれる授業サポートガイド」（2021）（以下「問いサポ」と表記）では、振り返る意義と指導のポイントを「授業を通して、児童生徒に『何が分かるようになったのか』『どんな変容があったのか』『もっと考えたいこと』などについて自覚するためには『振り返り』活動を充実させることが大切です。そのためには、子供自身に『振り返り』の意義を実感させ（中略）次時の授業への期待を高めることや家庭学習などへつなげることが必要」「新たな『問い』を持つ機会にもなる」と述べている。そのため、児童の学びの発展性や学びに向かう力の育成に向けた、教師の振り返りの支援が重要と考える。

(2) 振り返る内容と深化について

「問いサポ」では、振り返りの視点として「習得」「活用・探求」に分けている。「習得」では「分かった、できた」「○○さんは、なぜこう考えたのだろう。○○の考え方もあるんだ」と学びの変容の結果、交流を振り返る視点が記されている。「活用・探求」では「もっと、○○について考えたい」「もし○○だったらどうかな」と次時につなげる振り返りを行うことで「習得」より深化している。小林（2019）は「活動したことだけを書くだけでなく、脳に汗をかいて考えたことを書く」と述べ、小林、梶浦（2021）は「子どもの学びは、一直線上に深まって行くわけではない。らせん状に進んだり、戻ったりしながら学びを深める」と述べており、個人でじっくりこれまでの学習を振り返り、更に仲間と一緒に振り返ることで、多面的な見方で、お互いを認めることが、学びを深め協働的な活動になると考えられる（図2）。

(3) 振り返る内容の種類

小林、梶浦は『何の為にその振り返りをするのか』指導の意図やねらいは明確にしておくこと」と述べている。そこで、表2を作成した。振り返る内容の深化、種類等を一覧にしたことで意図的、計画的に各教

2. 授業スタイル

例：授業最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れた

小学校 算数A	よく行った	どちらかといえ ば行った	あまり行って いない
教育効果の高い学校	63.3%	30.0%	6.7%
教育効果の低い学校	26.7%	66.7%	6.7%

資料1 振り返る活動を計画的に行うと教育効果の高い学校（下線筆者）

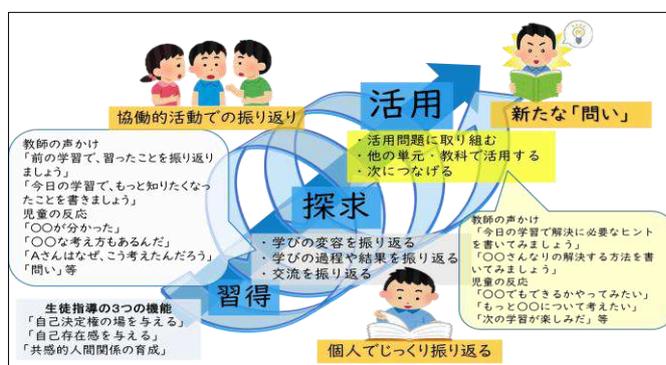


図2 振り返る内容と深化・視点・教師の声かけ（問いサポ 2021）をもとに作成

表2 【振り返り指導】の基礎知識（2021）をもとに作成
太字は、本研究で行った振り返る学び

振り返りの深化	振り返り学習の種類	名称	内容	生徒指導の3つの機能（主に使う機能）
活用 探求	A	資料引用型	資料の言葉を引用し、自分の考えを書いて振り返る。	「自己存在感」 「共感的人間関係」 「自己決定権」
	B	先人の知恵記述型	学習の体験や、先人の本から学んだことを比較的まとまった分量で考えを述べる。	「共感的人間関係」 「自己決定権」
	C	ワークシート型	1単元や1時間の学習で、最初に持った考え、話し合ったこと、最後に考えたことなど、自己の変容を書く。また、授業の時系列で、学習の資料を兼ねる。	「自己決定権」 「共感的人間関係」
習得	D	複数記述型	今日学んだこと・今日感じたこと・これから取り組みたいこと等、学んだ内容、考えたこと、疑問等複数の項目について振り返りを書く。	「自己決定権」 「自己存在感」
	E	段階評価アンケート型	よく理解できたか、楽しくできたか等を1～4段階にし、当てはまる段階に○を付けさせる。または、顔を描かせたり、○で囲み振り返る。（レーダーチャート等）	「自己存在感」 「自己決定権」
	F	ポートフォリオ型	A3やB4などの大きい紙を使用し毎時間の考えを日記の様に書き加え振り返る。学習後は、1つの資料になる。	「自己存在感」 「自己決定権」
	G	学習態度型	自分で進んで学べたか、友達と話し合って学べたか等学習の様子を振り返って書く。	「自己存在感」 「共感的人間関係」
	H	感想記述型	授業の感想を振り返って書く。	「自己存在感」
その他	I	知識・再生型	授業で分かったことを書く。	「自己存在感」
	J	思考ツール型	ウェビングやマインド・マップ等を使用し考えを整理し振り返る。	「自己存在感」 「自己決定権」
	K	ICT活用型	デジタル・ポートフォリオやグループ学習用のソフト（アプリ）を使用し振り返る。	「自己存在感」 「共感的人間関係」 「自己決定権」
	L	オンライン協働型	オンライン上で対話を通して振り返る。	「共感的人間関係」
	M	宿題型	授業では簡単な振り返り（丸つけ等）を行い、宿題で、一人じっくり考え振り返る。家族と話し合い、学習を振り返る。	「自己決定権」 「共感的人間関係」

科、単元の特性を考え最適に組み合わせることができると考えた。さらに、多面的に振り返る学びを行うことで、児童の自己評価や相互理解がより活発にできると考えた。

(4) 特別活動の評価

小学校学習指導要領特別活動（2018）（以下「特活編」と表記）では「特別活動の評価において最も大切なことは、児童一人一人のよさの可能性を積極的に認めるようにするとともに、自ら学び自ら考える力や、自らを律しつつ他人とともに協調できる豊かな人間性や社会性など生きる力を育成するという視点から評価を進めていくということである」と述べている。

そこで、授業展開で児童が自己を振り返る時間を 10 分以上は確保する。次に、表 2 の様々な種類の振り返り方法を活用し、視点を明確にして児童の変容を評価する。

IV 検証授業

1 題材「自分の『良さ』を見つけ、見つめよう」第 5 学年（全 3 時間）

学級活動「(2) 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」

「イ よりよい人間関係の形成」

2 題材について

(1) 児童の実態

これまで学級の取り組みとして、学校生活が楽しくなるように学級目標をみんなで話し合い決める活動、お別れ会を企画する際に、時間内に学級全員が楽しめる企画や相手のことを考えプレゼントを作る等の実践を行った。このような学級の実態をふまえ、5 年 1 組 28 名に選択式と記述式アンケートを行い学級や個人の実態把握を行った。選択式は、Google フォームを使用し、板津（1994）が作成した SASSV（自己受容尺度短縮版：Self Acceptance Scale Short Version）の質問文を参考に、児童が分かりやすい言葉に変更した。これを SASSV - NESV（自己受容尺度短縮版 - 西崎小学校版：SASSV - Nishizaki Elementary School Version）とする（以下「SASSV - NESV」と表記）。自己肯定感に関する質問では「現在の自分に満足している」との問いに対し「あてはまる、まあまああてはまる」と答えた児童は 79% だった。次に「やってみたいことの目標を決めて実行してみようとする」の質問では「あてはまる、まあまああてはまる」と答えた児童が 75% であった。記述式アンケートの自己受容や振り返りについての質問に対し、無回答の児童もいたことから「漠然と学習を行い、自分のことを振り返ることが苦手な児童がいる」と捉えることができる。

(2) 題材設定の理由

本題材「自分の『良さ』を見つけ、見つめよう」では、友達とお互いの「良さ」を見つけ「良さ」を交流する活動や振り返る学びを通して、自己受容を育み自己肯定感を高めることをねらいとする。またこの時期は、個人差はあるものの少しずつ子どもから大人へと成長していく時期で思春期を迎える児童もおり、男女で話す機会も少なくなる時期でもある。そこで「良さ」を見つけることは相手をしっかり観察する必要や「良さ」を伝えることで、男女間の関係が良好になりよりよい人間関係を形成できると考えた。

本題材で工夫している所は、お互いに「良さ」を交換し認め合い、友達の視点で自己の新たな「良さ」に気づく。次に、振り返る時間を確保することで「良さ」を再確認や再発見し「課題」に対して、自分に合ったよりよい解決方法を自己決定し実践していけると考えた。また、本検証授業は、オンライン配信で保護者も参観できるようにした。児童は、宿題として授業を振り返りながら保護者に伝え、一言コメントを頂く取り組みを行った。

最後に「自分の良いところ、直したいところを受け入れ、活動することができる」ことを本題材の目標として設定している。今後児童は、最上級生として学校の中心となり自主的、実践的に活動していく。そこで、他者と信頼し合い、よりよい人間関係を形成しながら自己受容を育み自己肯定感を高めると考える。

3 第5学年及び第6学年の評価基準

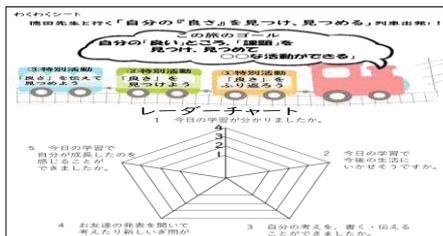
よりよい生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係を よりよくしようとする態度
日常生活への自己の適応に関する諸課題の改善に向けて取り組むことの意義を理解し、健全な生活を送るための知識や行動の仕方を身につけている。	日常生活への自己の適応に関する諸課題を認識し、解決方法などについて話し合い、自分に合ったよりよい解決方法を意思決定して実践している。	自己の生活をよりよくするために、見通しをもったり振り返ったりしながら、自主的に課題解決に取り組み、他者と信頼し合っ てよりよい人間関係を形成しようとしている。

4 生徒指導の3つの機能との関連

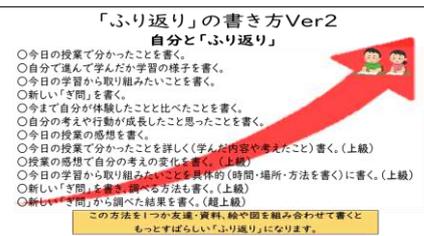
「特活編」では「特別活動の指導は、個々の指導や集団での生活や活動の場面において児童の自主性や自発性を尊重しながら展開されるものである」「指導に当たっては、児童との人間的な触れ合いを深め、児童一人一人に存在感や自己実現の喜びを味わえる場と機会を与えることが大切である」と述べている。このことから、生徒指導の3つの機能を指導案に明記し意図的、計画的に授業実践を行うことで、特別活動と生徒指導の相乗効果が高まると考える。

5 児童の振り返る学びの工夫

本題材で使用するワークシートは、児童が楽しんで学習することを願い「わくわくシート」と名付けた。使用するシートは2種類ある。授業の終末で書く振り返り用紙と「レーダーチャート」を用いて学習を振り返る。5つの質問に対し4段階で自己評価を行う。これを毎時間、同じシートに書き込むことで、自分の成長が視覚的に分かり、書くことが苦手な児童も振り返る事ができると考える。次に、毎時間書いたわくわくシートと、段階的に振り返る為に書き方を示した用紙を学年フロアに掲示した。(資料2・3・4)



資料2 レーダーチャートでの振り返り用紙



資料3 段階的な振り返る為の書き方を示した掲示物



資料4 掲示物スペースの振り返りを見る児童

6 本検証授業までの授業実践

生徒指導の3つの機能を生かし、振り返る学びの授業実践を本検証授業までに2時間行った。第1時は、事前アンケートから学級の実態を把握し、自己の「良さ」と「課題」について考えた。児童から「『課題』は、自分を成長させる為に必要」と肯定的な意見もあった。また、この時間で「レーダーチャート」の振り返りや「段階的な振り返りの書き方」を確認した(資料5)。

本検証授業までの授業「自分の『良さ』を見つけ、見つめよう」1/3
めあて：自分の「良さ」と「課題」を見つけよう

自己存在感

つかむ さぐる

共感的人間関係

見つける

自己決定権

決める

学級の「良さ」や「課題」を掲示し、本題材の目標を確認する

自己の「良さ」だけでなく「課題」も考えることで、自己受容を育む

・お互いの振り返りを読み合うことで、書くのが苦手な児童にはヒントになる
・書く視点が増え、振り返る内容が深まる

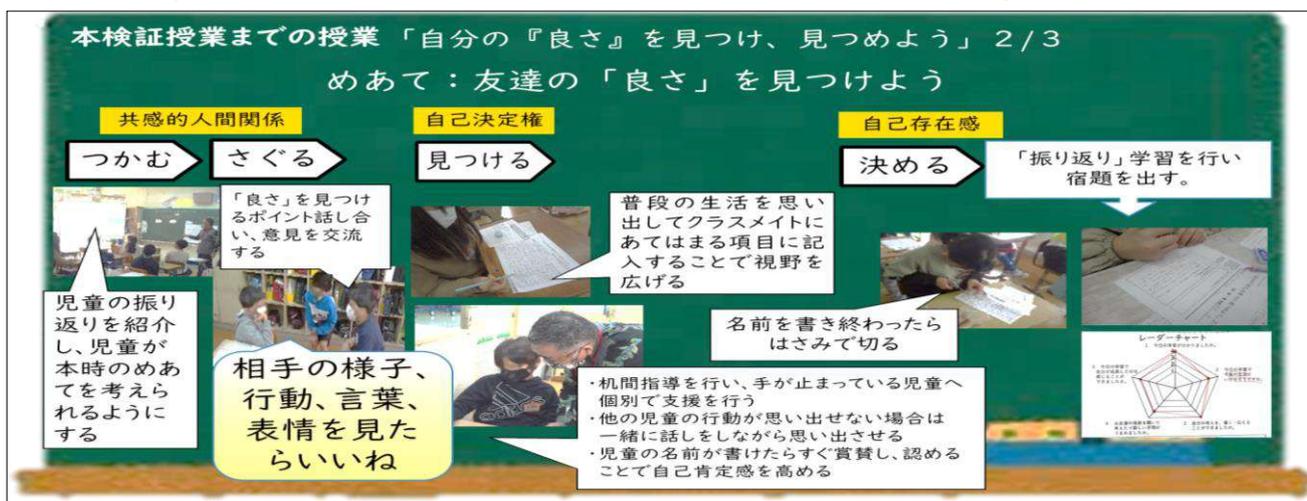
児童の振り返り(一部抜粋)

- ・「良さ」と「課題」を見つけることができました。
- ・「課題」を直すと成長していくことが分かりました。
- ・次の「良さ」を見つけようが気になる(次時の「めあて」につなげる)

・レーダーチャートを用いて振り返ることで、視覚的に学習を振り返る
・毎時間行うことで成長が見られ自己受容を育み、自己肯定感を高める

資料5 第1時の授業展開(実施日令和3年12月22日)

第2時では、第1時の児童の振り返りから本時のめあてにつなげた。「良さ」を見つけるポイントを話し合い、相手の「様子、行動、言葉、表情」を観察すると「良さ」が見つかることを発見した。友達の「良さ」がイメージしやすいようにたくさんの「良さ」を言語化した「わくわくシート」を準備した。児童は、学級の全児童の名前を記入する活動を行った（資料6）。



資料6 第2時の授業展開（実施日令和4年2月1日）

7 本検証授業の指導（実施日令和4年2月7日）

(1) 本検証授業のねらい

友達とお互いの「良さ」を交換することで、自己の「良さ」を多面的に見つめ、より自己を高めるための活動について意思決定する。

(2) 本検証授業の検証の視点

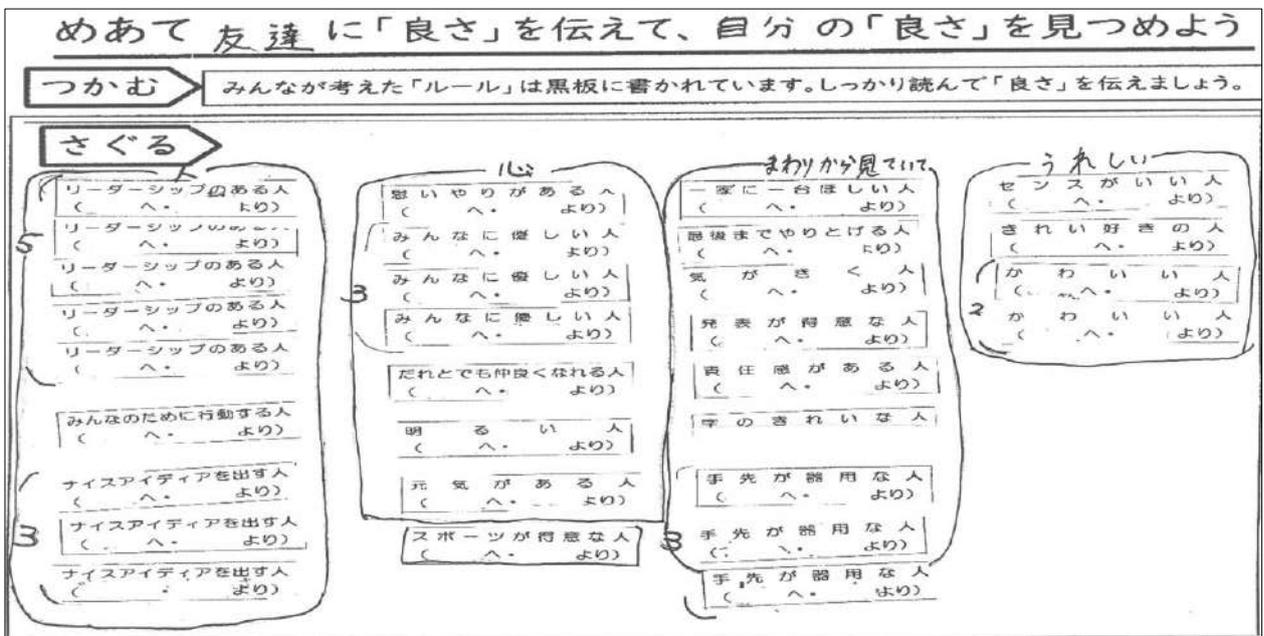
- ①生徒指導の3つの機能をいかした授業展開例をもとに、児童が変容しているか。
- ②自己の「良さ」を多面的に見つめ、振り返る学びができているか。
- ③より自己を高めるための活動について意思決定しているか。

(3) 本検証授業の展開

段階	学習活動	○指導上の留意点 □予想される児童生徒の反応 ◎教師の発問	【評価規準】 ◆検証の視点 ◎生徒指導の3つの機能（表1）参照 ㊦「振り返り」学習の過程
つかむ	1 前時の振り返りを行い、本時のめあてを確認する。	◎前回の学習を振り返りましょう。 ○渡し方、もらい方で相手に不快な思いをさせないように確認する。	◎（S1 自己存在感 イ） 前時の振り返りを行い児童が提案した渡し方、もらい方のルールを確認。
	2 学級で決めた「良さ」交流会のルールを確認する。	◎みんなが考えたルールです。ルールを守りながら楽しみ交流しましょう。また、どんな「良さ」があるか予想しましょう。 ○交流方法のデモンストレーションを行い、みんなルールを確認する。	「良さ」を早く見たい、友達に早く渡したい気持ちになる。
さぐる	3 友達に良さを伝え、自分の良さが書かれた紙をもらう活動を行う。	○交流中でも、良いお手本を皆に見てもらおう。 □喜んでくれるかな。 □私にはこんな「良い」ところがあると初めて分かった。	◎（S2 共感的人間関係 ウ） 友達と交流しながら自分の知らなかった「良い」ところを見つける。
	4 友達から見た自分の「良さ」を用紙に貼りながら自分の「良さ」を見つめる。	 <ul style="list-style-type: none"> ・児童がルールを作ったことで、交流を嫌がる児童はいなかった。 ・「〇〇さんは向こうにいるよ」と教えてあげる児童もおり、和やかに行われた。 ・「良さ」交流することでお互いを認め合っていた。 	

20分	 <p>仲間分けを行いながら、自己の「良さ」を多面的に見つめることで自己肯定感を高める。</p>	<p>◎自分の「良さ」を見て分かった事はありませんか。 ○友達からもらった「良さ」を仲間分けする。 □私は、○○の良さが多いな。 ◎この「良さ」で課題が解決できそうですね。</p>	<p>◎ (S1 自己存在感 オ)</p> <p>左側の児童は、渡す際に「良さ」を選んだ理由も述べていたので、お手本にした。児童を観察し自己肯定感を高める手立てを積極的に行う。</p> 
終末 見つける・決める 18分	<p>5 学習の「振り返り」を行う。</p>  <p>6 「振り返り」を発表する。</p>  <p>7 自分の「良さ」をいかして今後どのような活動を行えばよいか考える。</p>	<p>◎今日の活動を振り返りましょう。 ○書くのが苦手な児童には、わくわくシートに貼られた多様な「良さ」や板書を児童が振り返る際のヒントを示す。 □自分でも、わからなかった「良い」ところがあると分かって驚いた。 □自分の良い所をたくさん見つけてくれたので嬉しかった。 □友達に渡す時「ありがとう」といわれてうれしかった。もっと「良い」所を見つきたいです。 □この「良さ」があれば自分の課題は解決できると思います。 □今回もらえなかった「良い」ところを今度はもらえるようにしたい。</p> <p>◎この数字分かりますか。(委員会引継ぎ式の日時を紹介する)</p> <p>○この「良さ」を今後の活動に生かすことを伝え「最上級生」を意識する声かけを行う。 ○書くのが苦手な児童には例文と一緒に考える。</p>	<p>◆自己の「良さ」を多面的に見つめ、振り返ることができているか。(観察、発表、わくわくシート) ☑多様な「良さ」を見て、振り返る。 ◎ (S1 自己存在感 オ カ) 発表することで賞賛され自己肯定感につながる。 ◎ (S3 自己決定権 オ) 今後どのような行動をとればよいか決める。 【思考・判断・表現】 日常生活への自己の良さや課題を認識し、友達の視点で自己の新たな「良さ」に気づき、互いを認めながら、より自己を高めるための行動について意思決定している。(わくわくシート) ☑自己のより良い活動を書いている。 ◆生徒指導の3つの機能をいかした授業展開例をもとに、児童が変容しているか。(授業展開) ◆より自己を高めるための活動について意思決定しているか。(観察、発表、わくわくシート)</p>

(4) 本検証授業の児童が書いた「わくわくシート」



8 本検証授業後の指導

児童の活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿 【観点】(評価方法)	生徒指導の3つの機能
<p>・自己の「良さ」を見つけそこから自己の「良さ」を伸ばすことを考える活動する。</p>	<p>・活動していない児童には、具体的な内容を一緒に考える。</p>	<p>◎自分の良さや課題、友達の良さを理解している。 【知識・技能】 (わくわくシート)</p>	<p>「自己存在感を与える」 「自己決定権の場を与える」 「共感的人間関係の育成」</p>

V 研究の結果と考察

研究の結果については検証前・検証後のアンケート、ワークシート記述、授業記録（写真やビデオを活用）をもとに行い、授業の実際と児童の変容を分析した。

1 生徒指導の3つの機能を生かした授業づくり

生徒指導の3つの機能である「自己存在感を与える」「共感的人間関係の育成」「自己決定権の場を与える」を意図的、計画的に学習に取り入れた。その結果から児童の変容を考察する。

(1) 抽出児童の変容

児童Aの振り返りの記述から考察する。検証前アンケートでは、自分の「良さ」「言われて嬉しい言葉」や、振り返りを無回答で提出していた。本題材の第1時の授業後の振り返りには「課題を良さに変える為に意識したい」と肯定的な振り返りを書いている。第2時の授業後の振り返りには「良さ」の見つける方法「相手の様子、行動、言葉、表情を見る」を明記している。早く「良さ」を見つけた児童の様子も観察し視野が広がった振り返りを書いている。本検証授業である第3時の授業後の振り返りでは「自分の知らない『良さ』を見つける事ができた」と自己を多面的に捉え「友達に感謝したい」と他者への感謝の言葉も書かれていた。検証後アンケートでは「もらっていない（良さの）カードもあるから、それを『課題』として頑張りたい」と自己の「良さ」を意識した意欲的な振り返りを書いている（資料7）。

児童Aの学習の記録

第1時
課題を良さに変えるためにこれからしようと思いました。

第2時
相手の様子や行動、言葉や表情を見たり見つけることができるようになった。みんなの良さを早く書きおこす人は、すごいな。まわりの人のことをよく見てみると思いました。

第3時
自分を言いたからあたはくれたので、自分ができなかった自分の良さを見つけることができました。自分が友達にありがとうをみんなにニコニコしながらもらってくれたのがうれしかった。一人にめんどくさいし、たがひやくしてもらってるから、ありがとう。お返ししたい。

検証後アンケート
アンケート3 自分の「良さ」や「課題」見つけることができましたか？○で囲みましょう。
（見つけることができました） ・ 見つけることができなかった）
理由も書いてみましょう。「課題」の解決につながった人もいたら書いてみましょう。
みんなから良さのカードをもらって、自分では気がつかなかった良さを
見つけることができました。もらってないカードもあるから、それを課題として
これからがんばりたいと思ったからです。

資料7 児童Aの変容（下線筆者）

(2) 他の児童の変容

児童A以外にも検証前アンケートを無回答で提出した児童も自分なりの考えをもち授業の振り返り、検証後アンケートを書くことができた。そこで本題材の目標である「自分の『良さ』や『課題』を見つけることができましたか」の結果は、検証前より21ポイント増えた（図3）。検証後の記述式アンケートで児童Bは「3時間の授業で自分の「良さ」が分かり新しい『課題』を見つけられた」と自己を見つめた意欲的な気持ちが溢れる振り返りを書いた（資料8）。

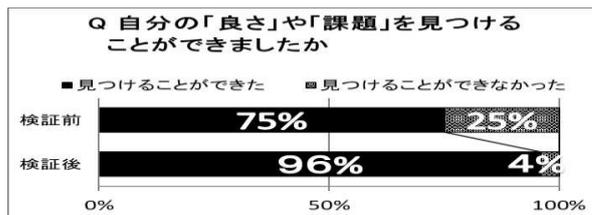


図3 自己受容のアンケート

1番最初の授業のときは、自分の良さはあまり見つけられなかったけど、3時間の授業で、みんなから自分の良さを褒められてから、新しい自分の良さを見つけられたし、新しい課題も見つけられた。

資料8 児童Bの変容

これらの結果から、生徒指導の3つの機能を学習指導案に明記し意図的、計画的に授業づくりを行うことで、自己を多面的に見つめ、お互いの「良さ」を認め合うことで、感謝などの共感的な人間関係の育成につながり、社会的資質や行動力を高めることができたと考える。

2 振り返る学びを取り入れた授業づくり

本研究では、「わくわくシート」や学年フロアでの掲示物を用いて振り返る学びを行った。児童の振り返る用紙と「レーダーチャート」での自己評価をもとに自己受容を育む上で生徒指導の3

つの機能が有効だったか考察する。

(1) 授業実践での児童の振り返る学び

児童Bの振り返りは、自己の「良さ」を増やしたいと考え、図を用いて振り返りを行った。児童Cの振り返りや、内容が良かった児童の振り返りを授業の導入時に紹介し、振り返る学びのヒントとした(図4)。資料8は、児童Dの「レーダーチャート」での振り返りである。5つの質問を4段階で自己評価することで、学習理解を視覚的に分かるようにした。児童Dは第1時では、自分の考えを書く、伝える質問が1点であった。しかし、学習を重ねるなかで第3時には大きな正五角形を作成することができた。また、別の児童は「レーダーチャートの数字が前の授業より上がってきた。これをキープしたい」と振り返りに書いていたことから、外発的動機づけである「レーダーチャート」の振り返りが、内発的動機づけに変容したと考えられる。また、毎時間の児童の自己評価の点数を平均化した。教師は、児童の様子を数字で捉えることで次時の発問や展開を修正することができる。第1時の平均点は4点満点中、3点だったが、第3時では3.7点と学習への理解や意欲等が高まったと捉える。しかし、友達の発表を聞き考え新たな疑問を持った質問の平均点が2.7点と他の質問に対して低く、今後児童の発表から新たな「問い」を引き出すため手立てが必要と考える(表3)。

(2) 掲示物を通して振り返る学びの深化

学年フロアに設置した掲示物を利用した児童85%が見に行ったと答えている。また「振り返りの書き方」の資料を参考に、書きやすくなったと答えた児童は78%であった。理由として「友達の振り返りをヒントにしながらしは自分で書けるようになった」「振り返りのレベルを参考にした」「短い文をつなげて、長い文が書けるようになった」など、意欲的な意見もあった。しかし「宿題や友達とおしゃべりをして、時間がなかった」「忘れていた」「レベルの書かれた用紙の文字が多かったから読まなかった」との意見もあり、掲示物を見て役立つと思えるような工夫が必要と考える(図5・図6)。

このように、児童の振り返る学びは、授業での交流や掲示物等の手立てを通して、振り返りを書く視点が増え、自己評価や相互理解が活発になったと考えられる。また、本検証授業でお互いの学びを交流する際に自分の書いた振り返りの内容を消した児童がいたので、交流以外で振り返る学びの構築や、児童が安心する為の教師の声かけが必要と考える。

3 自己受容感を育み、自己肯定感を高める工夫

本研究を行う前後に「SASSV - NESV」と記述式アンケートを実施した。その結果から児童の変容を考察する。

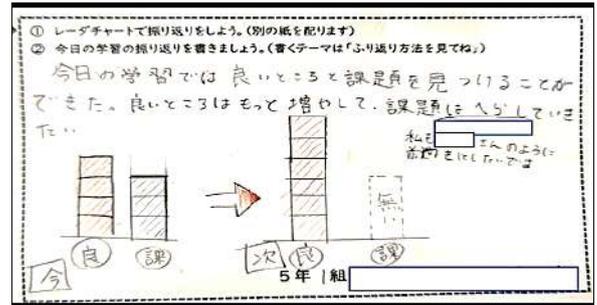
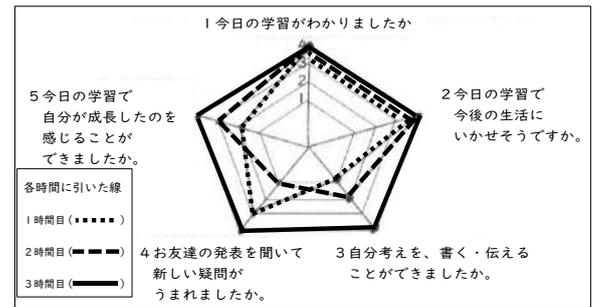


図4 児童Cの図を用いた振り返り



資料8 児童Dの学習を通しての振り返り

表3 レーダーチャートでの平均点

授業時数	1 今日学習が分かりましたか	2 今日学習で今後の生活にいかせようか	3 自分考え、書く・伝えることができましたか	4 友達の発表を聞いて考えた新しい疑問がうまれましたか	5 今日学習で自分が成長したのを感じることができましたか	毎時間平均 (4点満点)
第1時	3.5	3.2	2.7	2.7	3.0	3.0
第2時	3.8	3.5	3.2	2.3	3.0	3.2
第3時(本検証)	4.0	3.7	4.0	3.1	3.6	3.7
各項目の平均 (4点満点)	3.8	3.4	3.3	2.7	3.2	3.3

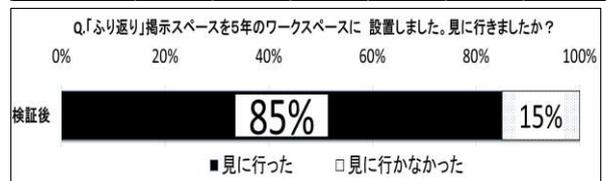


図5 掲示物を見に行った児童

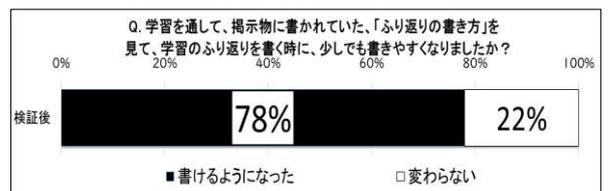


図6 振り返る書き方を参考にした児童

(1) 自己に関するアンケート

「私は現在の自分に満足している」の質問では、検証前「とてもあてはまる、まあまああてはまる」の肯定的な回答が79%から、検証後は4ポイント増えて83%との結果となった。これは、本検証授業でお互いの「良さ」を交換したからだと考えられる(図7)。検証後アンケートでも90%の児童が、第3時の本検証授業が心に残ったと回答している。選んだ理由は「自分のわからなかった『良さ』に気づけた」「友達に『良さ』を伝えると嬉しい気持ちになる」「友達からもらった『良さ』を見たりするのが楽しかった」「皆が『良さ』を渡しているとき笑顔だった」など、授業実践を通してありのままの自分や、他者を受け入れる素地である自己受容が育まれ、自己肯定感が高まったと考えられる。また『『ありがとう』や『うれしい』などのふわふわ言葉がいっぱいあった』と書いた児童もあり、これまでの学級指導も生かされていると考える。

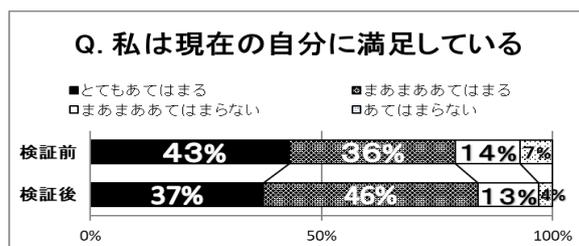


図7 自己肯定感のアンケート

次に「私は、やってみたいことの目標を決めて実行してみよう」の質問では、検証前は75%の児童が目標を決めて実行しようと考えていたことに対し、検証後は17ポイント増え92%になった。また「あてはまらない」が7%から0%になったことから、児童が本題材を通して自己を見つめ目標を決めて活動しようとする児童が増えた事が示されている。わくわくシートには「相手の『良い』ところを探し、自分の『良い』ところを伸ばす」「『ありがとう』をいっぱい言う」「あいさつを行う」「自分の意見をもって、発表する」と書いていた。ある児童は「皆に、『元気』や『計算が上手』をいっぱいもらったから、『元気に算数を教えたい』と友達の意見を認め取り入れるなど、今後の活動について書いていた。しかし、1週間後の検証後アンケートでは、36%の児童が自分で決めた目標の活動を行っていなかった。理由は「忘れていた」との理由や「6年生から始める」「そろそろやろうと思っていた」との前向きな理由もあった。また「活動したけどできなかった」と書いた児童もあり活動への支援も必要と考える(図8)。

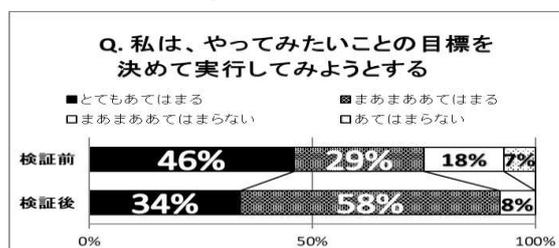


図8 本題材に関連したアンケート

わくわくシートには「相手の『良い』ところを探し、自分の『良い』ところを伸ばす」「『ありがとう』をいっぱい言う」「あいさつを行う」「自分の意見をもって、発表する」と書いていた。ある児童は「皆に、『元気』や『計算が上手』をいっぱいもらったから、『元気に算数を教えたい』と友達の意見を認め取り入れるなど、今後の活動について書いていた。しかし、1週間後の検証後アンケートでは、36%の児童が自分で決めた目標の活動を行っていなかった。理由は「忘れていた」との理由や「6年生から始める」「そろそろやろうと思っていた」との前向きな理由もあった。また「活動したけどできなかった」と書いた児童もあり活動への支援も必要と考える(図8)。

(2) 保護者の参加

本検証授業を保護者が授業参観できるようオンライン配信を行った。児童は、宿題として「わくわくシート」を家庭に持ち帰り、保護者に授業の様子を振り返りながら伝えた。保護者からも児童の「良さ」を認めるコメントを書くことで振り返る学びが広がり、家庭でも自己肯定感も高める手立てができたと考えられる。資料9は、保護者のコメントを一部抜粋したものである。

保護者A	クラスメイトからこんなにたくさん褒めてもらい母親の私も嬉しいです。褒める内容も具体的で良かったです。親以外の人からほめられる事がとてもいい経験になったと思います。
保護者B	元々自己肯定感があまり高くないので、今回の授業を通して自分の良い所と向き合えたのではないかと思います。友達に良いと思われている部分、又もらえなかった部分に対して頑張っていきたいと話していた。
保護者C	長所を見つけ伸ばし、認めることで自信につながったと思います。自分で気づけなかったことに気づくことで、視野が広がり今まで以上に多方面で活躍できるようになり可能性が広がったと思う。
保護者D	子ども達が楽しんで授業に取り組んでいる姿を見ることができた。改めて良い所を伝えられることで、自分を見つめ自信につながっていくのを感じ、本人も嬉しそうだった。後半の自分の良さから何ができたかにつなげることで、最上級生として自分の力を発揮できる場を見つける良いきっかけと感じた。

資料9 保護者の児童へのコメント(一部抜粋)

このように検証前に課題であった「漠然と学習を行い、自分のことを振り返ることが苦手な児童がいる」課題は減ったと考えられる。また、褒める事も大事だが、児童の中にある「良さ」を認めることも重要だと考える。以上を含め、生徒指導の3つの機能と振り返る学びに重点を置いた授業づくりを行うことで、自己受容を育むことができ、自己肯定感を高めることができたと考えられる。

える。今後も自己を肯定する気持ちを育み、高めるためにも年間を通して意図的、計画的に行う事も必要と考える。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 生徒指導の3つの機能を生かした意図的、計画的な授業づくりを実践した結果、多くの児童に自己受容が生まれ自己肯定感を高めることができた。
- (2) 生徒指導の3つの機能を生かした授業展開例、振り返りの種類を分類し表にしたことで、各教科や学級の実態に応じた手立てができた。
- (3) 児童の学習を振り返る時間を確保し、レーダーチャートを通して自己を見つめ、振り返る学びができた。また、児童の自己評価の平均を視覚化したことにより教師の意図的、計画的な支援につながる事ができた。
- (4) 学習の成果を保護者に伝える活動を取り入れたことで、授業だけでなく、包括的に児童の中にある「良さ」を認める活動ができた。

2 課題

- (1) これからも、より自己肯定感を高める為に本題材を年間計画に位置づけ他教科とも連携し、包括的に行うことも必要。
- (2) 児童の発達段階に応じた交流の工夫や支援方法の確立し、今後生徒指導の機能が「規範意識の醸成」を含め4つになることから、さらなる研究に努める。

〈主な参考文献〉

- 梶浦真 著 小林和雄 監修『主体的・対話的で深い学びを実現する【振り返り指導】の基礎知識』
(有)教育報道出版社 2021年
- 沖縄県教育委員会 『沖縄県学力向上推進 5か年プラン・プロジェクトⅡ』 2021年
- 沖縄県教育委員会 『問いが生まれる授業サポートガイド』 2021年
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総則編』 東洋館 2018年
- 文部科学省 『小学校学習指導要領 特別活動編』 東洋館 2018年
- 有村久春 著 『改訂三版 キーワードで学ぶ 特別活動 生徒指導 教育相談』
金子書房 2017年
- 新里 健/島袋 有子 『やってみようソーシャル・スキル・トレーニング』
株式会社 グリーンキャット 2011年
- 文部科学省 『生徒指導提要』 教育図書株式会社 2010年
- 文部科学省 『新しいしい学習指導要領の考え方ー中央審議会における議論から改定
そして実施へー』 2019年
- https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
取得日 2021年10月14日
- 中村眞一 『教員に求められる資質・能力と 自己肯定感についての考察』
神奈川大学心理・教育論集 第42号 2017年
- <https://core.ac.uk/download/pdf/291677494.pdf> 取得日 2021年10月11日
- 板津裕己 『自己受容性と対人態度との関わりについて』教育心理学研究 第42巻
第1号 一般社団法人 日本教育心理学会 1994年
- https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep1953/42/1/42_86/_pdf 取得日 2021年10月11日